

美術活動の連携について

—北海道立釧路芸術館、釧路市立美術館の事例を基にした考察—

福田 隆眞・中野 良寿

Collaborative Activities in the Promotion of Arts:

A case study of Kushiro Art Museum, Hokkaido and Kushiro City Museum of Art

FUKUDA Takamasa, NAKANO Yoshihisa

(Received December 7, 2009)

キーワード：釧路市、美術活動、地域連携、美術教育、ワークショップ

はじめに

美術教育の実施において、平成10年の文部省の教育課程の改訂によると、地域の美術館博物館の利用による鑑賞活動の奨励を促している。また、近年、地域の美術館、博物館は社会教育に対して積極的に働きかけることによって開かれた美術館、博物館の理解を一般市民や学校教育関係者に促進してきた。

また、地域には特色を持った美術館、博物館の設置が促進された時代があり、いわゆる「箱物行政」によって地方自治体の美術館、博物館、学習センターなどの社会教育機関が相次いで建設され文化行政、文化政策の一翼を担ってきた。

しかしながら、以上の2つには文化政策の当初の期待を実現するために、現実的にはいくつかの問題が生じてきている。一つは義務教育における美術教育や社会教育としての美術教育と美術館、博物館等の連携の実施における問題、数多くの文化施設の建設によって生じた費用対効果の問題などである。

本稿では、これらの問題を前提として、山口市と人口規模の類似した北海道釧路市における美術館、博物館等の文化施設と美術教育との連携について2009年11月に訪問調査し、山口市、山口県における美術活動の連携を試作するための試案を述べる。

1. 釧路市について

釧路市は北海道東部、太平洋沿岸に位置し、人口約186000人（2009年）を擁している。日本製紙、王子製紙の工場を有する工業が盛んな街で、北海道最大の穀物輸出入港を有する港湾都市である。また、釧路湿原や阿寒湖などの国際的観光地が周辺にあり、6町1村が観光圏、文化圏、生活圏となっている。

美術、教育関連の文化施設としては、北海道立釧路芸術館、釧路市立美術館、釧路市立

博物館、釧路市立こども遊学館がある。北海道立釧路芸術館は北海道における道立美術館建設の一環として音楽施設も併合した施設として設置されたものである。また、こども遊学館は科学的な学習を体験的に習得するための施設である。以下には北海道立釧路芸術館と釧路市立美術館の美術活動についての調査を述べる。

2. 北海道立釧路芸術館について

北海道立釧路芸術館は釧路・根室圏内の新しい芸術文化の拠点として平成10年10月に開館した。釧路市の中心部、幣舞橋の袂を流れる釧路川に面して建設され観光施設の一部ともなっている。この館は優れた芸術作品や芸術活動を紹介し、北国の個性的な文化の形成を目指す活動を展開している。そのために以下の3点の活動を実施している。

①優れた作品の収集、保存

写真などの映像作品、自然をテーマとする作品、釧路・根室地域と関連する作品などを系統的に収集し、特色あるコレクション作りをしている。

②多彩な展覧会

国内外の優れた美術作品を様々なテーマで紹介する特別展や、この館のコレクションを中心とした企画性ある所蔵品展など、幅広い展示の実施をしている。

③多様な芸術との出会い

美術展に加えて、ユニークなコンサートや映画会なども開催するほか、講演会やセミナーなど親しみやすい普及活動を実施している。また、閲覧コーナーでは多様な芸術文化情報を提供している。

この館では学芸主幹の柴勤氏のほかに五十嵐聡美氏、福地大輔氏の2名の学芸員が美術活動的内容的な企画、実施を行っている。一般市民等への啓蒙的美術活動として、ワークショップ、美術講座、フリーアートルームの開放などが行われている。

ワークショップは成人向けと児童生徒向けのものが用意されている。最近の成人向けのものとしては、フェルト工芸、木工によるペーパーナイフ作り、藁草履作り、染織、絵本などの教材が実施されている。各ワークショップには15-20名の受講生が参加している。

美術講座では、館で開催されている展覧会に関連するものと単独のテーマのものと合わせて年間50回の講座を開催している。毎回30-50名の受講生が集まり学芸員からの専門的な講義を受講している。講座の内容は、日本美術、映像、西洋美術などを中心とした学芸員の研究分野に即したものが企画、実施されている。(図1, 2)

フリーアートルームはいわば多目的な活動が実施できる空間で、夏と冬2ヶ月間、一般に開放され、自由な美術活動を行うことができるように提供している。また、学校美術に関わる作品展の実施も行われている。訪問調査の2009年11月5日にはちょうど釧路市内の学校美術の工作の展覧会が開催されていた。(図2, 3) こうした館の開放は釧路市立美術館、釧路市立こども遊学館でも同様に実施されている。これらは美術館と一般市民との連携による事業であり美術活動である。

連携事業としては、美術館同士の連携が実施されており、一つの展覧会を美術館と市立美術館が同時に開催するという事例もある。また、学芸員相互の理解を深める機会を積極的に持ちながら、連携による効果を模索、実施している。北海道立と釧路市立という設置機関が異なっていることを超越して、美術活動の活性化のために連携協力をしているので

ある。

また、この館では近隣の北海道立帯広美術館との連携で、北海道の特色のひとつであるアイヌ文化についての展覧会を実施した実績もある。

さらに一般市民との連携はボランティア活動によるものがある。情報収集、ミュージアムショップ、喫茶コーナーの営業などがそれに当たる。情報収集においてはボランティア会員によって新聞の全国紙および北海道地方紙の文化欄等における美術展、芸術評論、音楽会、芸術家紹介等の記事を収集、分類してプリントファイルを作成している。(図4, 5) こうした地域の協力と連携によってこの館の存在価値を高めていくことを実践している。



図1 釧路芸術館



図2 釧路芸術館ホール、コンサート、美術講座に使用



図3 学校教育による工作展

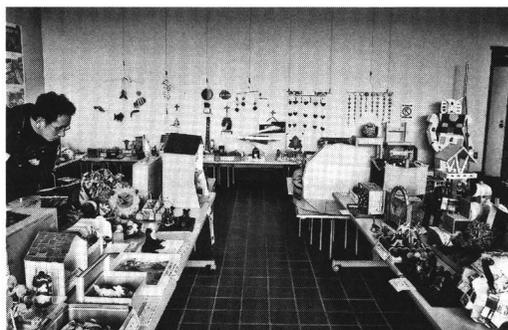


図4 学校教育による工作展



図5 情報の収集



図6 情報ファイルの作成

3. 釧路市立美術館について

釧路市立美術館は平成4年11月に、市内を一望できる幣舞の高台に生涯学習の拠点施設である釧路市生涯学習センター（まなぼっと幣舞）の3階にアートギャラリーとして開館した。（図6）以後、多くの優れた展覧会を開催し、市民にも親しまれたこの施設も、平成12年4月に、より一層の飛躍を目指し、「釧路市立美術館」と名称を変え、再出発した。

館内は大小2つの展示室を中心に高水準の展示機能を備え、国内外の優れた美術品を紹介する特別展や所蔵作品を中心とする常設展を活動の主体に据え、郷土で活躍する作家の作品や郷土にゆかりのある作品を収集・研究するほか、ハイビジョンシアターでの作品の解説やセミナー、美術講習会など生涯学習センターの機能を活用した教育普及事業により、複合施設としての利点・特長を十分に活かしたものとなっている。この市立美術館は風土に根ざし、市民と共に築き上げていく地域の美術館として活動し、心の潤いと豊かさを求めた生涯学習推進の一翼として機能している。

この館には瀬戸厚志学芸員、角井千代絵学芸員の2名の学芸員が所属し、展覧会、美術活動、文化啓蒙の活動を企画、実施している。両名とも作品制作の経験と教育に関わる実践の経験を積んでいる。

この館は釧路市立生涯学習センターの建物内部に位置しているため、生涯学習センターへの参加者も容易に入館することができる環境にある。また、生涯学習センターは送迎のためのバスを所有しており、バスの活用によって学校教育への支援を行っている。

この館においても美術講座、ワークショップ、ボランティアによる活動など地域の市民や学校教育との連携を実施している。

美術講座は、生涯学習センター自体にカルチャー教室が開催されているため、ここでは鑑賞と実技の組み合わせによる講座を実施している。主に学校教育との連携により「アート・スクール・プロジェクト」を教育普及のプロジェクトとして実施している。参加者は年間約2000人の実績を持っている。

また、工作イベントをワークショップの一環として年間3回開催している。参加者は200-300名である。学芸員が講師となり講座を運営している。こうした活動を積み重ねることにより、子どもだけで美術館に来館するようになり、活性化が図られた。また、企画展等の観覧のために送迎バスを活用し、釧路市近郊の学校をも含めて美術展鑑賞の児童生徒の参加者数を増加することがなされた。開館以来、入館者の最低数は平成14年当時15000人であったが、自助努力により平成20年度には2倍の30000人の来館者があった。

この館の学芸員は来館者数の増加のための自助努力として、美術館のキャラクターを創作して「ペキタ」君を産みだし、子どもたちの人気となっている。さらには「くしろアートマップ」を作成して市内の観光名所、公共機関に配布して、釧路市全体の美術活動の活性化に寄与している。

美術館を支える方法のひとつとして一般市民の愛好者の獲得が考えられる。その実践として、この館は「アートギャラリー協会」を組織し、年間2000円の会費で一般市民の鑑賞団体を維持している。現在会員数は約600名である。

この館の企画展においても連携事業が見られる。その例として2009年11月5日に訪問調査した時点では、ヴェネツィア・ビエンナーレ日本代表として北海道から初めて参加した

岡部昌生のフロッタージュ・プロジェクトが開催されていた。この展覧会は創業90周年を迎える雄別炭鉱跡において市民とともにフロッタージュ（擦りだし）作品を制作し、釧路、阿寒、音別において展示し、アートを通して、釧路の炭鉱の歴史を振り返る展覧会となっている。このプロジェクトには北海道教育大学美術教育研究室の佐々木宰准教授とその学生、同大学附属釧路中学校美術担当の花輪大輔教諭と同中学校生徒も参加している。（図7,8）



図7 釧路生涯学習センター

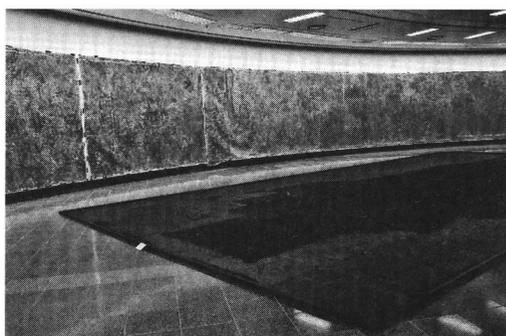


図8 岡部昌生フロッタージュ・プロジェクト展

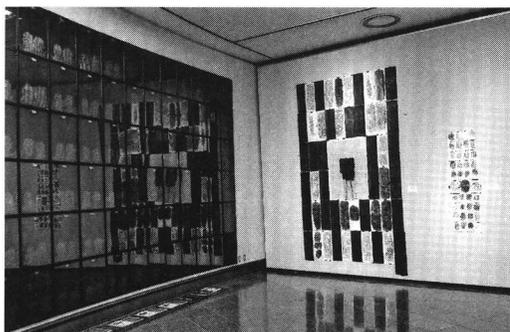


図9 岡部昌生フロッタージュ・プロジェクト展

4. 連携事業の実施と模索

美術館をはじめとする教育・文化施設と大学、学校、一般市民、社会との連携について、以下のような組み合わせによる連携が想定できる。美術館同士あるいは美術館と他の教育・文化施設、美術館と大学、美術館と小中学校等の学校教育、美術館と企業、美術館とギャラリー等の組み合わせによる連携を想定することができる。以下には美術館等と大学、学校教育の関連ですでに実施されている例をあげる。

(1) 美術館等の相互の連携

この場合は、釧路市においてもすでに実施しているように一つの展覧会を2つの館によって開催する等の事例である。物理的にも内容的にも2つ以上の美術館、博物館が共同開催をすることにより、大規模な企画や観点の異なった企画を一つの展覧会として開催す

ることが可能である。

(2) 美術館等と大学

美術館と大学の組み合わせは、美術館だけではなく博物館も含めた教育・文化施設と大学との連携である。これもすでに実施されている連携であり、その内容は研究機能と教育機能の2つの機能がある。研究機能では学芸員と大学教員等による共同研究があり、教育機能では大学生を含めた美術館と大学でのワークショップ、企画展示などである。北海道教育大学の佐々木宰が釧路市立美術館でフロッタージュの展覧会に参画した事例はそれに該当する。

また、大学を主体とした場合の連携では、大学内における連携事業に美術館等が参画する場合である。学芸員による教育連携、美術作品の貸与による教育的啓蒙的展示会の開催、美術館、博物館の研究内容の紹介等が考えられる。

(3) 美術館等と学校教育

美術館等と学校教育の連携では、学校教育による作品展示、美術館からのワークショップ、美術館による教員研修などである。これについてもすでに実施されている事業であり、文部科学省の教育課程の改訂により地域の美術館、博物館の利用、活用の促進が謳われている。

以上の連携に加えて、美術館等と一般企業やギャラリーとの連携を模索することができる。例えば、現代のデザインによる工業製品の展示、手作りによる工芸品、ファッションのように地域の産業に潜んでいる美術的要素の紹介など一般企業等を対象とした展示を美術の観点から実施することも可能である。その場合、大学のような研究機関が参画することも可能である。

また、大学と多数の教育・文化施設の連携としては、一つのテーマによる様々な観点からの同時開催ということも可能である。例えば「和紙」というテーマによって、美術作品の展示、科学的観点からの展示、和紙による工芸品のワークショップ、和紙を解説し教育用展示、伝統的和紙の作品展示などの他分野にわたる展示によって総合的に理解をする機会を提供することが可能である。

まとめと考察、山口市での展望

釧路市における地域連携の事例を考察してきたが、山口市において、どのような地域連携のモデルが考えられるのかということを示してまとめと今後の展望としたい。

山口市および山口県内の周辺地域における地域連携の可能性のある機関をあげると以下のようなになる。

(1) 大学および教育機関

山口大学、山口県立大学、山口芸術短期大学、山口県内の小・中・高等学校

(2) アートセンター

山口情報芸術センター、秋吉台国際芸術村

(3) 美術館

山口県立美術館、下関市立美術館、山口県立萩美術館・浦上記念館

(4) 博物館

山口県立科学博物館、美祢市立秋吉台科学博物館、萩博物館

(5) 伝統工芸などに関する文化センター

山口ふるさと伝承総合センター

(6) 公共機関の運営するギャラリー

クリエイティブ・スペース赤れんが、山口市菜香亭、山口市民会館

(7) 民間の運営するギャラリー

ギャラリーナカノ、ギャラリー・ラ・セーヌ、ギャラリーシマダ

(8) 山口市内の特定非営利活動（NPO）法人および美術支援団体

山口現代藝術研究所（YICA）、山口県造形教育研究会

(9) 山口市および周辺地区における美術関連の実行委員会

アートふる山口実行委員会、山口アーツ&クラフツ実行委員会、萩まちなかアート実行委員会

現状では上記のような機関が山口市およびその周辺地域において文化的な活動を行なっている。4章で示した連携事業の実施案にしたがって山口の場合におけるいくつかの連携の実績と組み合わせ例を考察してみる。

美術館等の相互の連携を山口市において考えてみると、可能性としては地理的に近い山口県立美術館と山口情報芸術センターが同じテーマで展覧会を開催することが考えられる。山口情報芸術センターと秋吉台国際芸術村とは地理的には離れているが、それぞれメディアアートと現代美術、あるいは身体表現を専門に扱う機関であることから共通のテーマや人材を交流させやすい部分があり、過去には両者の学芸員を交えたシンポジウムや招聘アーティストが秋吉台国際芸術村で滞在制作を行ない、山口情報芸術センターで発表する共同企画を開催したこともある。特に秋吉台国際芸術村には山口情報芸術センターにはないレジデンス施設があることから長期滞在の芸術家などの拠点として連携することも考えられる。また、地理的なことを考えるとこの中に山口県立科学博物館を入れることも視野におくことができる。この場合、芸術と科学の越境、あるいは学際的な研究、展示が求められる。

美術館等と大学の連携の例としては山口市にある三大学と山口県立美術館、山口情報芸術センター、秋吉台国際芸術村、下関市立美術館、博物館も加えると山口県立科学博物館、美祢市立秋吉台科学博物館、萩博物館などもあげられる。学芸員と大学教員等による共同研究を研究機能として行なう場合、それぞれ異なる専門の枠組みを少しだけ外して単独の研究機関では行なうことができないような研究ができるだろうか。美術作品の鑑賞に関する教材作りなどはこういった研究をはじめの糸口としてふさわしいと思う。また、釧路市立美術館や北海道立釧路芸術館のように教育機能として大学生を含めた美術館と大学でのワークショップ、企画展示なども行なうことができる。これまでに秋吉台国際芸術村と山口情報芸術センター、山口県立美術館で行なわれたワークショップには山口大学からの学生が多数参加しており、サポートスタッフとしても貢献してきている。

美術館等と学校教育の連携の事例としては山口県立美術館や山口情報芸術センター、秋吉台国際芸術村と山口県内の小・中・高等学校の美術の教員が参加している山口県造形教育研究会との連携があげられる。山口県立美術館や秋吉台国際芸術村では毎年この研究会の主催する山口県学校美術展覧会の審査会場および作品展示の場所を提供してくれている。また、この研究会の会員と県立美術館の学芸員が主に参加するメーリングリストの整備や県内の学校教職員を対象とした県立美術館主催の研修会なども行なっている。

山口における以上の連携例は上記の(1)～(9)における各機関の組み合わせ例のほんの一部である。民間の特定非営利活動(NPO)法人やギャラリーなどを含めて試案するとさらにたくさんの組み合わせが考えられる。特に先端芸術から伝統芸術や、美術から科学分野までなどの広い分野を視野にいった場合、いままでの枠組では捉えきれなかった連携領域が浮上してくる可能性がある。釧路市での実践では生涯学習センターと美術館が近くにあることによって両者の空間が活性化していることや美術館のマスコットキャラクターによる地域住民に対する美術活動の認知度の向上促進や学校と美術館とを結ぶ専用バスによる送迎の充実など山口市の現状では不十分なことが、いくつもあげられる。また、現在の地方の機関においても予算の削減が大きな問題とされているが、釧路の事例では人的ネットワークを最大限に活用した都市の大きさに見合ったきめ細やかな連携を進めることの大切さを再認識させてくれた。

最後に、地方都市における美術活動の連携によってさらに検討して行きたい内容として地域における芸術交流の促進、美術教材研究など教育現場にも有用な波及効果、大学と地域文化機関が連携を強化することによって相互の活性化、学士課程、修士課程レベルの教育において美術文化の理解と創造の機会が増え、専門教育以外の学生にとっても有益であること、国際文化交流の促進などの課題があげられる。これら美術活動の連携が地域社会の活性化に寄与することを釧路での実践を参考にしながら山口での具体策を今後も模索して行きたい。

参考文献

- 佐々木 宰：道立釧路美術館との連携による大学授業の試み，北海道生涯学習研究第6号，pp.60-69，北海道教育大学生涯学習教育研究センター，2006.
- 佐々木 宰：北海道立釧路美術館との連携による美術教育実践研究：北海道生涯学習研究第7号，pp.85-94，北海道教育大学生涯学習教育研究センター，2007.
- 佐々木 宰：北海道立釧路美術館との連携による美術教育実践研究(2)，北海道生涯学習研究第8号，pp.99-108，北海道教育大学生涯学習教育研究センター，2008.
- 佐々木 宰 滝田 彩：美術館施設との連携による造形教材の開発ー北海道立釧路美術館における版画ワークショップの事例ー，北海道教育大学紀要(教育科学編)，第60巻，第1号，pp.153-163，北海道教育大学，平成21年.
- 北海道立釧路美術館パンフレット
- 原田真千子(秋吉台国際芸術村)：trails_小径：，秋吉台国際芸術村，2009.
- 吉岡 洋：Diatxt/yamaguchi ヨロボン，星雲社，2008.

付記

本研究は平成21年度山口大学教育学部学部長裁量経費に基づくものである。あらためて教育学部にお礼申し上げます。また、釧路市の調査に当たっては北海道教育大学 佐々木 宰准教授に日程調整、会議設定、実行のお世話をいただきました。感謝の意を表します。